

# 福島県金山町方言における意志・推量表現形式「べ」の意味・用法

市岡 香代

## 1 はじめに

本稿では、福島県大沼郡金山町方言の「べ」<sup>1)</sup>について、高年層話者の意味・用法の記述を行う。

東日本の広い地域で用いられている「べ」であるが、その意味・用法に地域差がみられることは、各地の方言記述や国立国語研究所編(1994)、同(2002)等から明らかである。概観すれば、東北地方のように「べ」一形式で意志と推量を表す地域と、関東地方のように意志表現には「べ」を使うが、推量表現には推量専用形式「ダンベ」を使い、形式を分ける地域とに大きく二分することができる。前者の方言では、「べ」の担う意味領域が非常に広いため、推量専用形式や他形式の導入などによって、意味により形式を分化させる方向への変化が起こっていることが推察されよう。

本調査では、前者にあたる東北地方の福島県大沼郡金山町方言を取り上げる。金山町方言は、福島県内の会津方言域に属し、「べ」が意志と推量の両方の表現形式として用いられる方言である。つまり、金山町方言の「べ」は、意志でも推量でも用いられる未分化な形式であるといえる。本調査の目的は、まずこのような未分化形式の「べ」が、どのような意味・用法を持っているのかを記述することである。そして、さらに年齢による意味・用法の変化を見ることで、意志・推量表現において形式の分化が起こっているか、それはどのような変化の過程を経ているかということ記述することが目的である。

本稿ではまず、高年層話者に見られる「べ」の伝統的な意味・用法を記述する。金山町方言の高年層話者における「べ」は、形容詞のカリ活用形式を現在でも保持していることから、他の方言と比較すると古い形態を保持していることが特徴として挙げられる。また意味的特徴としては、金山町方言の「べ」は、意志・推量の両方の表現形式として用いられ、形式の分化は起こっていないことが指摘できる。しかし、推量表現においては、「べ」を用いた「イクべ」と、用言に推量専用形式「ダベ」を後接した「イクダベ」という2形式がみられ、推量の中でも現代標準語「のだろう」に相当するような場合には「用言+ダベ」が用いられるという用法の違いがあることが指摘できる。

## 2 先行研究と調査の概要

### 2.1 先行研究

福島県方言の意志・推量表現については、国立国語研究所編(1994)、同(2002)に表現形式の分布が見られる。福島県方言は、地理的区分を反映し、浜通り地方/中通り地方/会津地方と3区分されるといわれている。意志・推量表現については、福島県全域で「べ」の使用が見られるが、「べ」に接続する際に、前接語の語末が撥音化するか促音化するかという点において大きな地域差が見られる。太平洋側の浜通り地方から中通り地方にかけては語末が促音化した形式が見られるが、会津地方では促音化形式は用いられない。また名詞述語の推量表現の場合も、浜通りでは「～ダッペ」という形式が用いられるが、会津では用いられず「～ダベ」が用いられる。しかし、このような形態的な違いはあるものの、「べ」が意志・推量の両方の意味を担う形式であるという点は全県域に共通する特徴である。

また、全国的分布図とグロットグラム調査から東日本全体の「べ」の分布と変化を考察したものに井上(1985)がある。井上(1985)では、東日本において、東北地方と関東地方はそれぞれ異なる変化が進んでいることが指摘されている。東北地方では、仙台・福島付近を中心に、動詞・形容詞・名詞などすべての場合に文を終止させる形に「べ」をつけるという方向に単純化が進んでいると指摘し、それを「べの終助詞化」と名づけている。対して、関東地方では、意志表現と推量表現で形式を使い分ける方向、つまり意志表現には「べ」を、推量表現には用言に「ダンベ」や「ダッペ」を後接させる形式を用い、意味により異なる形式を用いるという方向に変化が進んでいると分析されている。

福島県内の各地の方言における「べ」について詳細な分析をしたものには、中通りの岩瀬郡天栄村白子方言の飯豊(1962a) (1962b)、会津の喜多方市方言の橋本(2004)などがある。また会津地方の音韻・語彙・文法について調査を行ったものに加藤他(1980)がある。これらの研究については、次節以降で本研究と関わる部分を取り上げる。

### 2.2 調査の概要

福島県大沼郡金山町は、福島県西部に位置し、越後山脈をはさんで新潟県と接している日本有数の豪雪地帯である。会津若松市と新潟県魚沼市を結ぶ国道とJR只見線の途中に位置する。人口は約3200人で、高齢化率48%という非常に高齢化の進んでいる町である。

福島県は地理的に浜通り/中通り/会津と3区分され、言語的にもその地理的区分を反映しているとされている。金山町方言は会津方言に区分される。

調査は、2005年6月から10月にかけて面接質問調査で行った<sup>2)</sup>。80代から20代の年齢の異なる12名に調査を行い、そのうち6名に複数回詳細な調査を行っている。基本的に標準語の文を提示して文全体を方言に翻訳してもらおうという翻訳式で行ったが、特定の文脈の中で方言形式を話者に示してその使用を尋ねるという方法も併用した。

本稿では伝統的方言体系の記述を目的とするため、高年層の話者の結果をもとに詳細な用法の記述を行う。

インフォーマント：A氏

1927年生(調査時78-79歳) 男性 金山町中川在住

言語形成期を金山町で過ごし、教員として会津地方内の学校に赴任。

会津地方以外には、群馬県に半年だけ居住したことがある。

### 3 金山町方言の「べ」の形態的特徴

本節では、まず金山町方言の「べ」の形態的特徴について記述したい。ここでは意味・用法は問題とせず、前接語の品詞ごとに、金山町方言で用いられる形式を挙げ、その形態的特徴を示す。さらに、福島県内の他方言、特に会津地方の他の方言との異同を指摘し、金山町方言の特徴を明らかにする。

金山町方言の「べ」は、前接語が動詞・助動詞の場合、活用形に関係なく終止形に接続する。一段動詞やカ変・サ変動詞の場合でも語幹接続の形は用いられない。サ変動詞の場合は一段化した「シンベ」という語形も使われる。また、語末がラ行音の場合には撥音化するのが普通である。

(1) アイツワ コノグライ スグ カクベ<sup>3)</sup> (あいつはこのぐらいはすぐ書くだろう)

(2) テレビデモ {ミンベ/\*ミベ}<sup>4)</sup> (テレビでも見よう)

(3) ハテ ドレニ{スンベ/シンベ/\*スベ/\*シベ}カナー (さて、どれにしようかな)

形容詞の場合は、「アツイベ」というような終止形に接続する形式と「アツカンベ」「アツカベ」というようなカリ活用の連体形に接続する形式の2形式を用いる。カリ活用連体形に接続する形式は、「語幹+カリ活用連体形活用語尾カル+べ」と分析できるが、金山町方言では撥音化した「アツカンベ」や「ン」が縮約された「アツカベ」というような形が用いられる。

(4) アシタワ {アツカンベ/アツカベ/アツイベ} (明日は暑いだろう)

また、形容動詞や名詞述語の場合は、終止形に「べ」を接続させた形式を用いる。

(5) コレワ サクラノキダベ<sup>5)</sup> (これは桜の木だろう)

(6) アノアタリワ ニギヤカダベ (あの辺りはにぎやかだろう)

次に、上のような形態的特徴を持つ金山町方言の「べ」が、どのように位置付けられるかを検討する。

「べ」の接続については、一般的に次のような点で地域差が見られる。

① 一段動詞やカ変・サ変動詞の場合、終止形接続か語幹接続か

② 形容詞の場合、終止形接続かカリ活用の連体形接続か

③ 「べ」の前接語の語末がラ行音の場合、撥音化或いは促音化することがあるか  
まず、動詞については、一段動詞やカ変・サ変動詞の場合の接続が問題となる。1976～1978年に調査を行った加藤他(1980)では、南会津地方全域に語幹接続形式が見られ、金山町でも同じように語幹接続形式が回答されている。これに対して、会津若松市を中心とする北会津地方では終止形接続が用いられている。同時期に調査している国立国語研究所編(1994)でも、加藤他(1980)と同様に南北会津地方で形式が異なる分布が見られ、金山町では語幹接続の語形が回答されている。つまり、1970年代後半の調査においては、会津地域内でも会津若松市を中心とする北会津地方では終止形接続、南会津地方では語幹接続という地域差があり、金山町では南会津地方と同じ語幹接続の形式が使われていたということがわかる。

しかし、今回の調査の結果では、金山町方言では語幹接続ではなく終止形接続形式を用いるという結果が得られた。これらのことから、両地方の境界に位置している金山町では、以前は語幹接続の形式が使われていたが、現在では北会津地方と同じ終止形接続の形式を用いるようになったということが指摘できる。

なお、国立国語研究所編(1994)によれば、福島県内の浜通り・中通り地方では、北会津地方と同じ終止形接続形式を用いることがわかる。

また、終止形接続の場合に、語末のラ行音が撥音化するという特徴については、会津地方全域で見られる特徴であり、太平洋側の浜通り地方から中通り地方にかけて見られる促音化形式は金山町方言でも用いられない。

形容詞については、加藤他(1980)では「アツカンベ」「アツカベ」というカリ活用の形式が広がっており、そのなかに「アツイベ」という終止形形式がわずかに分布していることがわかる。井上(1985)によれば、分布よりカリ活用の形をとる形式の方が形容詞終止形接続形式より古い形であるとされている。これらのことから、会津地方でもカリ活用連体形接続形式から終止形接続形式への変化が推察できる。橋本(2004)では、会津若松市に近い会津北部の喜多方市では、1997年の調査では高年層においても

カリ活用形式はほとんど用いられないという報告がなされている。しかし、今回の調査結果では、金山町方言では、現在でもより古い形式であるカリ活用の形式が多く用いられるという結果を得た。このことから、金山町方言は会津地方の中でもより古い形式を保持している方言であることが指摘できる。

形容動詞や名詞述語に「べ」が接続する場合は、すべての方言で終止形に接続するが、「～ダッペ」「～ダンベ」というように促音や撥音が挿入されるか否かで地域差が見られる。国立国語研究所編(1994)、同(2002)によれば、会津地方では「～ダベ」、中通り地方では「～ダンベ」、浜通り地方では「～ダッペ」を用いるという傾向が見られ、県内で地域差が見られるが、今回の調査では金山町方言では他の会津地方と同様に「ダベ」を用いることがわかった。

以上のことから、金山町方言の「べ」の形態的特徴は次のように整理できる。

- A 前接語が動詞や助動詞の場合、終止形に接続する。一段動詞やカ変・サ変動詞の場合でも、語幹接続の形式は現在では用いられない。
- B 前接語末がラ行音の場合には、撥音化することが多い。
- C 形容詞の場合、カリ活用連体形接続形式「アツカンベ・アツカベ」と終止形接続形式「アツイベ」を併用する。
- D 形容動詞や名詞述語に接続する場合は終止形に接続し「～ダベ」という形になる。県内の他方言で見られる「～ダッペ」「～ダンベ」というような形式は用いられない。

これらの特徴は、おおむね他の会津方言の特徴と一致するが、動詞では終止形接続に接続が単純化しているのに対し、形容詞の場合には古形式であるカリ活用の形が残っていることが特徴的である。

「べ」の統語環境については、原因・理由の「カラ」や逆接の「ケレド」、並列の「シ」や引用の「ト」などの独立度の高い従属節内で用いる事ができるという点が指摘できる。また、終助詞については「カ」「カナ」「ナ」「ネ」「ヨ」などと共起する。

(7)キョーワ アメ フンベカラ カサモッテケ (今日は雨が降るだろうから、傘を持っていけ)

(8)キョーワ アメ フンベケド ウンドーカイワ ヤルヨ

(今日は雨が降るだろうけど、運動会はやるよ)

このような統語的特徴は、橋本(2004)で分析されている同じ会津地方の喜多方市方言の特徴と一致する。また、市岡(2005)で分析した栃木県下都賀郡岩舟町方言の高年層の「べ」の特徴とも一致する。

## 4 金山町方言の「べ」の意味的特徴

金山町方言の「べ」は、意志と推量の意味を表す。特に、推量の場合には、「べ」（「イクベ」）とともに推量専用形式である「ダベ」（「イクダベ」）も用いられる。以下では、金山町方言の「べ」の、意志と推量の意味・用法の特徴を示す。

### 4.1 意志

金山町方言では、話し手が行為を行おうとする意志を表す場合に「べ」を用いる。

(9)(10)(11)のように、話し手が、まだ現実化していないある行為を行おうとする気持ちを表わすとき「べ」を使う。このような<意志の表明>の用法では、独話や内心発話では終助詞を、対話において相手の質問に応答する場面で自分の意志を表明する場合には「と思う」や終助詞を後接することが多い。

(9) [仕事からの帰り道でつぶやく。]

ヘーサ ケータラ ユックリ ユサデモ ヘーンベナー

(家に帰ったら、ゆっくり風呂でも入ろう)

(10) [友人に「次の休みはどうするのか」と聞かれ答える。]

オンセンサデモ イクベトモッテル (温泉に行こうと思っている)

(11) [友人に「仕事をやってくれないか」と頼まれ答える。]

ヨカンベ オレガ ヤンベ (いいですよ。私がやろう)

また「べ」は疑問詞や疑問の終助詞とも共起し、行為内容に不確定な要素を含む場合にも使うことができる。

(12) [パンを選びながらつぶやく。]

ドレニ {シンベ/スンベ}カナー (どれにしようかな)

(13) [パンを選びながらつぶやく。]

コレニ {シンベ/スンベ}カ アレニ {シンベ/スンベ}カ

(これにしようか。あれにしようか。)

(14) [鍵を忘れてしまったことに気づいて、つぶやく。]

ナジョ {シンベ/スンベ} (どうしよう)

このように話し手が、まだ現実化していないある行為を行おうとする気持ちを表わすとき「べ」を使う。

また、話し手の行為が聞き手に恩恵を与えるような行為の場合に、その行為を行うことを聞き手に申し出ることがある。このような<申し出>の場合にも「べ」は使うことができる。

(15) [訪ねてきた友人が帰るとき、友人に。]

オクッテヤンベ (送ってあげよう)

(16) [部屋の中で友人と話をしていると段々暑くなってきたので、友人に。]

センブーキオ ツケンベカ (扇風機を付けようか)

さらに、話し手が一緒に行為を行うよう聞き手を勧誘する<勧誘>の場合にも、「べ」を使うことができる。

(17) イップク (シンベ/スンベ) (-服しよう)

話し手と聞き手が一緒に行為を行う場合だけでなく、話し手がしている行為を聞き手も一緒にするよう勧誘する(18)のような場合にも「べ」は使うことができる。

(18) [皆でお菓子を食べているところへ、別の友人が入ってきた。その友人に。]

オメーモ イッショニ クーベ (お前も一緒に食べよう)

以上のように、金山町方言では話し手が行為を行おうと意志を表明する場合に「べ」を使う。「べ」は独話や心内発話だけでなく、対話でも用いられる。対話で用いられる場合には、話し手が聞き手に恩恵を与えるような行為実行を申し出る<申し出>の用法や、一緒に行為を行うよう聞き手を誘う<勧誘>の用法も持つ。

金山町方言の「べ」の意志の用法は、飯豊(1962b)や橋本(2004)で報告されている福島県内の他方言の「べ」の意志の用法と等しい。また、福島県以外の方言でも、玉懸(1999)で分析されている仙台市方言や、市岡(2005)の栃木県下都賀郡岩舟町方言の「べ」の意志の用法とも等しい用法である。

また、このような「べ」の意志の用法は、標準語の意志形「う・よう」と等しい特徴を持っているといえる。

## 4.2 推量

金山町方言の「べ」は、意志とともに推量を表す場合にも使う。

これまでの先行研究では、会津方言では意志でも推量でも「べ」を用い、推量専用形式「ダベ」の使用は報告されていない。同じ会津地方に属する喜多方市方言の「べ」を調査した橋本(2004)でも、推量専用形式「ダベ」の使用は報告されていない。しかし、今回調査した金山町方言話者の談話では、推量表現として「用言+べ」に加え、「用言+ダベ」という形も見られる。推量表現において、この2形式は等しく用いられるのだろうか。

飯豊(1962a)(1962b)は、中通りの岩瀬郡天栄村白子方言の「べ」についてその用法を記述しているが、ここに注目すべき指摘がある。白子方言では、推量の場合「カク

べ」「カクダンベ」「カクンダンベ」という3形式を用い、それぞれ意味の違いがあるという指摘である。飯豊(1962a)では、3形式の意味と共通語との対応を以下のようにまとめている。

「カクベ」：一般的な事情・条件を総合して推量している。「書くだらう」に対応。

「カクダンベ」：推量する根拠がある。「書くだらう」「書くのだらう」に対応。

「カクンダンベ」：具体的徴証を根拠として説明する推量である。「書くのだらう」に対応。

飯豊(1962b)では、共通語との対応が「カクベ」「カクダンベ」：「書くだらう」, 「カクンダンベ」：「書くのだらう」と変わっているが、意味の違いは飯豊(1962a)と同様の記述である。ただし、飯豊(1962a)では福島県内の地域差にも触れられているのだが、上のような違いを持つのは、中通り・浜通り地域であり、会津地方にはこのような意味の違いはないとされている。

しかし、本調査では、会津地方の金山町方言においても「用言+ベ」(カクベ)「用言+ダベ」(カクダベ)「用言+ンダベ」(カクンダベ)という3形式を用い、同じ用言に接続する「ベ」と「ダベ」では用法に違いがあることがわかった。金山町方言においては、「用言+ベ」は、未来や現在あるいは過去の事態を単に推測する場合に用いる。これに対して、「用言+ダベ」は、「用言+ンダベ」と等しい用法を持ち、現代標準語の「のだらう」に相当する場合に用いる。つまり、「用言+ダベ」は「用言+ベ」とは異なる意味的特徴をもつことがわかった。

以下本節では、推量の用法を<推量>と<確認要求>に分け、「用言+ベ」「用言+ダベ」が異なる特徴をもち、標準語の「だらう」「のだらう」の使い分けに対応することを示す。

## 4.2.1 <推量>の用法

### 4.2.1.1 「ベ」を使う場合

金山町方言では、未来や現在あるいは過去の事態を単に推測する場合、「用言+ベ」を使い、「用言+推量専用形式ダベ」という形式は使わない。

(19) アシタモ (サムカベ/サムイベ/\*サムイダベ)ナー (明日も寒いだらうなあ)

(20) アシタワ アメ {フンベ/\*フルダベ}ナー ([空を見ながら]明日は雨が降るだらうなあ)

(21) アーダ シェッコンデッテ {マンニアッタベ/\*マンニアッタダベ}カナー

(あんなに慌てて行って、(あいつは)間に合っただらうかなあ)

(19)～(21)のように独白的に表明する場合だけでなく、質問に対して応答する場面で

も「ベ」は使うことができ、また聞き手に判断を尋ねる場合には疑問の「カ」を伴って「～ベカ」と発話する。

(21)(22)のように過去の事態を推測する場合にも「ベ」が用いられる。飯豊(1962b)では、加えて「過去形+ンベ」という形式も用いることが報告されているが、金山町方言ではこの形式は使用しない。

(22) [「昨日奥さんは家にいたか」と尋ねられ、答える。]

キノーフ ウチニ {イタベ/\*イタダベ/\*イタンベ} (昨日は家にいただろう)

#### 4.2.1.2 「ダベ」を使う場合

これに対して、現在や過去の事態について、その背後にある原因や理由を推測する場合には、「用言+ダベ」或いは「用言+ンダベ」という形式を用い、「用言+ベ」は用いない。

(23) [寒いといって震えている友人を見て、別の友人と話している。]

アイツ ネットデモ {\*アンベ/アンダベ/アルンダベ} (熱でもあるのだろう)

(24) [さっき出かけたばかりの隣の家の子供が、走って帰ってきたのを見て。]

ワスレモノデモ {\*シタベ/シタダベ/シタンダベ} (忘れ物でもしたのだろう)

事態の原因や理由がわからなかったりはっきりしなかったりする場合には、話し手自身の心内で考えたり、聞き手に問いかけたりするが、この場合にも「ダベ」を用いる。疑問の終助詞の「カ」をつけたり、疑問詞を用いたりして尋ねる。

(25) [大きな鞆を持って歩いている友人を見て、別の友人と話している。]

A: アイツワ ドコサ {\*イクベ/イクダベ/イクンダベ}

(あいつはどこに行くのだろう)

B: リョコウサデモ {\*イクベ/イクダベ/イクンダベ} (旅行にでも行くのだろう)

(26) [道に人が集まっているのを見て]

ナニガ {\*アッタベ/アッタダベ/アッタンダベ} (何があったのだろう)

また、原因・理由の推量とはいえないような用例でも、現代標準語で「のだろう」を用いるような場合には「用言+ダベ」或いは「用言+ンダベ」を用いる。

(27) [探し物をしているがなかなか見つからない。]

ドコサ {\*アンベ/アンダベ/アルンダベ} ((一体) どこにあるのだろう)

(28) [窓が開めてあるのに、ハエが入ってきた。]

ドツカラ {\*ヘーッテキタベ/ヘーッテキタダベ/ヘーッテキタンダベ}

(どこから入ってきたのだろうか)

このように、金山町方言では、現代標準語「のだろう」を用いるような場合には「用言+ダベ」と「用言+ンダベ」を用い、「用言+ベ」は用いないということがわかった。つまり、おなじ用言に後接する「ベ」と「ダベ」ではあるが、その意味は異なっているということができる。

現代標準語「のだろう」については、田野村(2002)では、「あることがら $\alpha$ の背後の事情が $\beta$ であることや、問題の実情が $\beta$ であることを、推量して述べたり、推量や事実についての確認を聞き手に求めたりするのに用いられる。(pp. 72)」とされ、その用法が単に事態を推測して述べる「だろう」とは異なるということが指摘されている。本調査でも、「ベ」と「ダベ」は、単に事態を推測するか、何らかの前提となる事態がありその事態に関する推量であるかという点で使い分けがされており、田野村(2002)で指摘されている標準語「だろう」「のだろう」の用法の異なりと一致する。

では、「用言+ダベ」と「用言+ンダベ」の2形式には、意味上の違いはあるのだろうか。今回の調査の結果では、この2形式は(23)～(28)のように同じように使うことができ、そこに意味的な違いは見られなかった。飯豊(1962a)(1962b)では、前述したようにその違いが指摘されているが、両形式とも根拠に基づく推量であるという点は共通しており、その点で「用言+ベ」とは大きく異なるとされている。今回の調査でも、「用言+ダベ」と「用言+ンダベ」を用いる場合には、何らかの前提となる事態があるという特徴があり、その点で「用言+ベ」の用法とは異なる。飯豊(1962a)では会津地方には見られないとされていた「用言+ベ」と「用言+ダベ」「用言+ンダベ」との違いが、会津地方の金山町方言にも見られるということが今回の調査結果からは指摘できるが、「用言+ダベ」と「用言+ンダベ」には意味的な違いは見られなかった。

形容動詞や名詞述語の場合にも、「ベ」と「ダベ」の違いは動詞・形容詞の場合と同様で、「のだろう」に相当する推量の場合には(29)(30)のように「ベ」は使えない。

(29) [甘い物に全く手をつけなかった友人が帰った後で、片づけながら独り言を言う]

アイツ アマイモノガ {\*キライダベ/キライナナベ<sup>6)</sup>/キライナンダベ} ナー

(田中さんは甘い物が嫌いなのだろうかなあ)

(30) [子供たちがよく慕っている先生について。]

キット {\*エーセンセーダベ/エーセンセーナナベ/エーセンセーナンダベ} ナー

((あの先生は) きっといい先生なのだろうかなあ)

このように「用言+ダベ」が「用言+ンダベ」と同じように現代標準語「のだろう」に相当する場合に用いられるのは、金山町方言では、(31)(32)のように、用言の連体形が準体用法を持っているからだと思われる。つまり、推量専用形式「ダベ」の前に

準体助詞の「ン」が入っても入らなくても同じ意味を表すことができるのである。

(31) ゴゴカラ ワカマツサ {イクンダ/イクダ} ケド

(午後から会津若松に行くのだけど)

(32) [いつもより遅く帰ってきた子供に対して。]

ナジョ {シタンダ/シタダ} (どうしたのか)

ちなみに、現在用言の連体形が準体用法をもたない方言ではこのような特徴は見られない。市岡(2005)によれば、栃木県岩舟町方言では、このような現象は起こらず、現代標準語「のだろう」相当の場合には、必ず準体助詞を必要とし、「用言+ダンベ」と「用言+ンダンベ」は使い分けられている。

(25)' リョコウニデモ {イクダンベ/イクンダンベ} (旅行にでも行くのだろう)

ただし、この方言では「用言+ベ」と「用言+ダンベ」が等しく用いられる<sup>7)</sup>という点で金山町方言とは大きく異なっている。

#### 4.2.2 <確認要求>の用法

話し手の推量内容を聞き手に確認したり、知識や記憶を確認したり、また聞き手の注意を喚起したりする<確認要求>の場合にも「ベ」は使うことができる。

<確認要求>の場合にも、「用言+ベ」と「用言+ダベ」という2形式が見られるが、<確認要求>の用法をさらに細かく設定しても形式の使い分けとは関係がみられず、「用言+ダベ」は<推量>の場合と同じように現代標準語の「のだろう」に相当する場合に用いられる。

(33) [重そうな荷物を運んでいる友人に対して。]

ソノニモツ {オモテーベ/\*オモテーダベ}。モツテヤルヨ

(その荷物は重たいだろう。もってあげるよ)

(34) [買い物をしてきたという浪費家の友人に対して。]

ドーセ オメーノコトダカラ タカイモノオ {\*カッタベ/カッタダベ}

(どうせお前のことだから、高いものを買ったんだろう)

(35) [出かけるといったのに、なかなか支度をしない子供に対して。]

オメーモ {\*イクベ/イクダベ/イクンダベ} ↑ ハヤクシロヨ

(お前も行くんだろう。早くしろよ)

(36) [昔のクラスメートと。]

クラスニ ○チャンテコガ {イタベ/\*イタダベ}。アノコ…

(クラスに○ちゃんという子がいただろう。あの子…)

(37) [道を尋ねてきた友人に。]

ホラ アソコニ ポストガ {アルベ/\*アルダベ}。ソコオ…

(ほら、あそこにポストがあるだろう。そこを…)

いずれの場合でも、<推量>と同様の使い分けがされている。4.2.1 の<推量>は、聞き手とは関わりを持たず単に話し手の判断を表明するもので、聞き手に問いかけたりするような聞き手と関わる部分の機能は終助詞が担っていたが、<確認要求>の場合は、話し手の判断を聞き手へ問いかける発話であるという点が異なる。しかし、そのような違いとは関係なく、<推量>と同様に「のだろう」相当の場合には「用言+ダベ」を使うという点が特徴的である。

## 5 まとめ

金山町方言の「ベ」について、形態的特徴と意味的特徴について述べてきた。金山町方言の「ベ」は意志と推量を表す場合に用いるが、特に推量については、「ベ」と推量専用形式「ダベ」との使い分けに着目した。特徴をまとめると以下のようになる。

### 形態的特徴

- (1) 「ベ」の接続は、動詞・助動詞の場合、活用とは関係なく終止形に接続する。形容詞の場合は、カリ活用連体形接続と形容詞終止形接続の形式がある。形容動詞・名詞述語の場合には終止形に接続する。また、推量専用形式としては「ダベ」が用いられる。いずれも前接語の語末がラ行音の場合には撥音化が多く見られる。
- (2) このような特徴は、会津地方方言とおおむね共通する特徴であるが、形容詞の場合はカリ活用の形式を用いており、より古い形式を現在でも保持しているといえる。

### 意味的特徴

「ベ」は、意志と推量を表す場合に使う。

- (1) 意志の場合、「ベ」は話し手の行為を行おうとする意志を表明する場合に使う。<意志の表明>が基本的用法で、その行為をするかどうかを聞き手に申し出る場合には<申し出>になる。また、聞き手に対して一緒に行うよう誘う<勧誘>の用法も持つ。
- (2) 推量の場合、「ベ」に加えて推量専用形式「ダベ」も使う。「用言+ベ」は、未来や現在あるいは過去の事態を単に推測する場合に用い、現代標準語「だろう」

に相当する場合に用いられる。これに対して、「用言+ダベ」は、「用言+ンダベ」とともに現代標準語「のだろう」に相当するような場合に用いられる。

今後は、年齢の異なる話者の結果をもとに、このような金山町方言の未分化な「ベ」の意味・用法が、どのように変化しているのかを明らかにしたい。

## 注

- 1) 「ベ」や「ダベ」は、当該方言では末尾音が長音化したりしなかったりするが、本稿では長音拍を省略して表記する。
- 2) 中年層・若年層については調査を継続中である。
- 3) 当該方言では語中のカ行子音は有声化する場合があるが、本稿では清音として表記する。
- 4) 用例の頭にある「\*」「?」は、それぞれ「文法的に不適格なこと」「文法的に不自然なこと」を表わす。また「↑」は文末イントネーションの上昇を表す。
- 5) 金山町方言では、ダ行子音がナ行子音と混同される現象が見られる。  
(5) コレワ {サクラノキダベ/サクラノキナベ} (これは桜の木だろう)
- 6) 金山町方言では、この場合「～ンダベ」が縮約され「～ナナベ」と発音されることが多い。
- 7) 市岡(2005)では、栃木県下都賀郡岩舟町方言では、「用言+ベ」「用言+ダベ」が標準語「だろう」に相当し、「用言+ンダベ」が標準語「のだろう」に相当することを指摘した。

## 参考文献

- 飯豊毅一(1962a)「方言の分布—推量表現「…べー」について—」『相模女子大学紀要』13
- (1962b)「意志・推量を表す「べー」について(一)—福島県における—」『国語・国文学試論』6・7号
- 市岡香代(2005)「栃木県岩舟町方言における意志・推量表現形式「べ」の用法」『日本語研究』25号 東京都立大学人文学部国語学研究室
- 井上史雄(1985)「現代東日本のべいの分布と変化」『新しい日本語—《新方言》分布と変化—』明治書院
- 加藤正信・半沢洋子・佐藤和之(1980)「会津地方の方言調査報告」東北大学日本文化研究所編『日本文化研究所研究報告別巻』17号
- 国立国語研究所編(1994)『方言文法全国地図』第3集 大蔵省印刷局
- (2002)『方言文法全国地図』第5集 財務省印刷局
- 菅野宏(1982)「福島県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学4北海道・

東北地方の方言』国書刊行会

菅野宏・飯豊毅一(1967)「言語生活」福島県編『福島県史』24号

田野村忠温(2002)『現代日本語の文法I「のだ」の意味と用法』和泉書院

玉懸元(1999)「仙台市方言の『べー』の用法」『言語科学論集』3 東北大学文学部言語科学専攻

野田晴美(1997)『「のだ」の機能』くろしお出版

橋本礼子(2004)『日本語諸方言における意志・推量表現の変化に関する研究』大阪大学大学院文学研究科博士論文

## 謝辞

調査にご協力いただきました渡辺良三氏、長谷川清造氏、押部ナミ氏をはじめ、金山町の皆様に心より御礼申し上げます。また、調査の実施にあたりましてご尽力いただきました金山町教育委員会および長谷川清尚氏に厚く感謝申し上げます。

(いちおか かよ・東京都立大学大学院生)